

後宮の棘6

～行き遅れ姫の覚悟～

香月みまり Mimari Kozuki



アルファポリス文庫

目次

後宮の棘6

く行き遅れ姫の覚悟く

5

番外編 あの日僕は知ってしまった

219

後宮の棘6

（行き遅れ姫の覚悟）

一章

カンカンと木刀がぶつかり合う音を聞きながら、翠玉すいぎょくは一瞬も逃すまいと、瞬きを最小限に彼らの動きを眺めて……もとい睨みつけていた。

「いいなあ」

無意識の内に呟いた言葉は、聞く者がいないまま消えるかと思いきや。

「なりませんよ」

ぱっちり後ろに控えていた衆しゅに聞き留められていて、厳しい言葉が返ってきた。

「木刀、持っただけでも？」

唇を尖らせて、上目遣いで見上げてみるが。

「なりません。奥方様は、持ったら振り回したくなるに決まっています」

「うん、たしかにね……」

取りつく島もない上、全て見透かされている。

仕方なしに一度座り直して、冬隼とうしゅんと泰誠たいせい、隆蒼りゅうそうと華南かなんの打ち合いをぼんやり眺める。

甘州かんしゅうにいた頃の冬隼の指示で、華南と隆蒼の自宅はすでに邸の程近くに用意されていて、ふたりは夫婦として生活を開始した。

思いを通じ合ってから、二ヶ月にも満たない短期間での婚姻だが、付き合いの長い彼等に今さら相手を知る期間も必要なからう。

隆蒼が十年もの間、一途に華南を思い続けていたのは周知のことで、帰都と同時に彼らの慶事が知れ渡ると、帝都に残っていた古参の軍関係者を中心にしばらく軍内はこの話題で持ちきりだったとか……

とはいえほとんが、「隆蒼、よかったな……」という隆蒼を祝い、ねぎらう声だったそうで、これには華南が「花嫁は私なのに、あんたが主役みたいじゃない！」と少し拗ねすていたらしい。

ひっそりとごく質素に行った婚儀が終わり、新居への転居を済ませた後、少し休暇を取った彼らが戻ってきて、なんとなく大所帯になったように感じる邸は、翠玉がここに嫁いできた時に比べ随分とにぎやかになった。

まるで厄介払いのように祖國——清劉国せいりゅうこくを追い出され、敵国・湖紅国ここうこくの帝弟であり禁軍の総大将である冬隼のもとに嫁にきた頃のこの邸は、随分とひっそりとしていた。

邸の主である冬隼は禁軍を束ねることに忙しく、そんな主人の身の回りの世話をし

たり、邸を守ったりするわずかな忠臣達が淡々と日々の仕事をこなすばかり。

そんな中にやってきた、招かざる妻——翠玉。彼らにとっては敵国であった清劉国の皇女ということで、はじめは冬隼やその周りの者たちに随分と警戒されたものだ。

ひよんなことから、翠玉が武に精通しており兵法にも覚えがあることが知られ、護衛兼お目付け役として双子の楽と樂が付けられた。

その後、翠玉が刺客から冬隼を庇う形で負傷し、その後も度々刺客に命を狙われたために、邸には多くの警備が付けられ、人も増えた。

翠玉の命を狙い刺客を送っていたのは、湖紅国の前皇后であり、現皇帝と冬隼たち兄弟の政敵でもあった皇太后だ。彼女は東左という宦官を影として後宮に潜ませ、皇帝の子達を害し、皇帝の腹心として宰相を務める皇弟——雪稜の妻である朱杏を弑し、そして次に翠玉を狙ったのだ。皇太后が没した後も東左は戦場まで執拗に追いかけてきて、冬隼に討たれた。

これで邸も少し落ち着くかと思いきや、今度は翠玉の懐妊がわかり、赤子を迎えるための準備で人が増え、そこに華南と隆蒼も加わり、毎日夕刻には木刀で打ち合う音が響き渡る。

当然翠玉は見ているだけだが……

木刀に触れない、動かないを約束させられ、この場にいることが許されてはいるも

の、見ていればやはり体はうずいてくる。

しかし、きちんとお目付け役はいるわけで、翠玉は仕方なく、人の動きを見て勘だけは失わないようにしている。

華南が隆蒼との打ち合いを終えて、楽を呼び出した。最初は馬が合わなかった様子の二人だが、今ではすっかり気を許しあっている。

とは言っても、元より楽が一方的に誤解していただけなので、姉御肌の華南に楽が懐くのも時間の問題だと翠玉は察していた。思った以上に二人が意気投合して、無茶しがちな翠玉を結託して諫めるようになったのは想定外だった。

そんなわけで、華南は翠玉に変わって、双子の指導もよくやってくれており、双子達も必死に華南から吸収しようとしている。

華南と楽の打ち合いに気を取られていると、隆蒼と泰誠、冬隼が戻ってきた。泰誠が楽を誘い、打ち合いに向かい、隆蒼が水を汲みにその場を辞した。

隣に座った冬隼に、濡れた手拭いを渡すと彼は汗を拭う。

「退屈じゃないか？　なんなら部屋に戻ってもいいのだぞ？」

「あら、ダメよ。動けなくても想像して感覚は鍛えないと！　こんなに長く剣を持たないなんて考えたこともなかったもの。どんなに鈍るのか分からないから、怖いわ」慌てて反論する。

前回、毒で伏せた時も感覚を戻すのに随分時間を要したのだ。

十ヶ月という歳月がどのように影響を及ぼすのか未知である。

「お前が甘州から大量に借りてきた書物には、それは書いていないのか？」
 椰^{から}掀^かうように言われて翠玉はむくれる。

「あるわけないわ！ 他にためになる事はいっぱい書かれていなければならないけれど、出産で身体が鈍る事を気にする女性なんて滅多にいないんだから！ 一応は調べているのよ！ 特に葉草ね。筋力を落とさず、妊婦の身体に障らないものを今探しているの！」

拳を胸の前で握って見せる。

それを見た冬雫は、憂鬱そうに大きく息を吐いた。

「そうだな……あの強烈な匂いのする葉草だが……保管部屋を用意させるように桜季に手配を頼んだからな」

「うん。桜季に聞いたわ！ 昼間に一式移してもらったから、部屋の臭いは取れたはず」

軍へ立ち入ることを禁止されている今、日中の翠玉には時間が有り余っている。

そこで翠玉が目を付けたのが、紫瑞^{しすい}国・緋堯^{ひきょう}国の連合軍との戦の際に拠点となった甘州にて、甘州宰である悠案^{ゆうあん}の妻、桜鈴^{おうりん}から譲り受けた書物である。

異国から取り寄せたと思われる希少な書も多く、妊娠にまつわる様々な内容が記載

されている中、翠玉が特に興味を惹かれたのが葉草にまつわる事柄だ。

甘州にいた頃から、葉草を入手しては、調査してという事を始めていたものの、いざ帝都に戻り時間を費やすようになると、葉草の奥深さは想像以上であった。

教えを乞うたり、自ら試行錯誤して調査したりと、おとなしく部屋にこもっている翠玉に冬雫が安堵し、邸に平和な空気が流れていたのはほんの数日の内。

葉草に凝ってしまった翠玉と、その臭いに参ってしまった冬雫の間で、実は少し揉めていたのだ。

本来ならば妊婦である翠玉には、極力大人しくして欲しいと願っている冬雫も、さすがに白旗を挙げざるを得なかったようだ。葉草を集めるのを控えるようにと言われたものの、身体を動かすことを禁じられている翠玉にとって、新しくできた趣味ともいえるものを取り上げられてはたまらない。結果、臭いがこもらないよう自室から葉草を移動させることで決着がついたのだ。

数日続いた静かな戦いに勝った翠玉が、満足気ににこりと微笑むと、冬雫は対照的に憂鬱気にまた深く息を吐いた。

「あまりのめり込みすぎるなよ。周りの者達から休憩の指示が出たら従うように！ ただでさえ色々引き受けて忙しくなってきたいるじゃないか……」

「あら、これくらい大丈夫よ？ 今試しに飲んでいる煎じ^{せんじ}薬^{やく}のおかげですごく調子が

良いの。医師からお墨付きをいただいているし！ あと華南もね、肌の艶を補う薬草を飲み始めたの！ 肌艶が良くなったと思わない？」

そう爛々と話した翠玉は「ほら！」と楽と打ち合う華南を指した。

冬隼の眉間にシワがよる。違いはわからないうえ、そんなの一切興味ないと言いたげな顔である。

そんな夫の表情に、はあつと翠玉は息を吐く。

「隆蒼は分かるみたいなのに……」

胸の内に秘めた、つまらないなあという気持ちが伝わったのか、冬隼は心外だと眉を寄せる。

「それは夫だからだろう。夫婦ならば触れることもあるわけだし……俺がわかる方が問題だぞ？」

「そうなの？」

呆れた様子の冬隼に首を傾けて問いかける。

「そりゃあそうだ」

そう即答した彼が、おもむろに手を伸ばしてきて、頬をゆるりと撫でられる。

直前まで打ち合っていたせいか、熱を感じるしつとりした指の感触に、なぜかドキリと胸が跳ねる。

「もしお前だったら、俺だって気づくさ」

急に甘くなった空気に、顔が火照りだす。

こんなところで!! いや、これはきつと冬隼の手の熱が移ったのよ!

慌ててどこにもとなく言い訳を並べようとするけれど、すでにそうでない事は身をもって知っている。

最近の冬隼は、体を重ねられない分、特に甘くて……翠玉が顔を上げられないくらいの言葉を囁く事もあるし、口づけや触り方だけで翠玉を翻弄していくのだ。

慌てて視線を逸らすと、そんな翠玉の心の機微など見透かしているらしい冬隼が、ククツと喉を鳴らして笑った。

悔しいわ……

どうやら遊ばれていたらしい。薬草をめぐる攻防に勝った翠玉へ対する意趣返しだろうか。むうつとむくれて睨み上げると、さらに笑みを濃くした冬隼がおもむろに翠玉の顎を持ち上げて……ほんの一瞬軽く触れるだけの口づけを落としたのだ。

「っ、ち! こん!!」

慌てて体を離して抗議する。

「ちよつと! こんなところで!」……といった、そんな言葉は驚きのあまり言葉にすらならず、翠玉の反応に満足した様子の冬隼がさらに笑う。

そんな二人を盗み見していたのは、双子の相手をしながらも余裕のある泰誠と華南で……

「殿下……成長したなあ」と、微笑ましく思っていたとかいなかったとか。

もともと生涯独身を貫くつもりだった冬隼が、不本意ながらも嫁をとることになったと聞いた時、周囲は随分と驚いたものだ。

堅物で、後継争いの渦中で育ったその生い立ちから他人を簡単には寄せ付けない彼が、敵国の皇女を妻として愛し、過保護なほどにその身を案じることになろうとは、誰も想像していなかった。

最初は、自分と同じように後継争いに命を脅かされながら育った翠玉の生い立ちと、不遇な中でも手折られず強く前向きな姿に。

次に、冬隼を守ろうと迷うことなく身を差し出したその献身と責任感の強さ、武に対する姿勢と思慮深さ、兵法を操るその資質、誰もがひきつけられる明るさと芯の強さに。そして、時折見せる寂し気な様子や押し込められている脆さ。

ともに過ごす中で見せる様々な翠玉の一面に冬隼は惹かれていき、彼女の居場所となりたいと強く思うようになっていったのだ。

その想いが通じ、互いに愛し合うようになり、そしてその証である子供が今、翠玉の腹の中で育っている。

また新たな二人の道が始まろうとしている穏やかな日々の中、この時間が波乱の中の束の間のものであることを知りながらも、少しでもこの時間が長く続けばいいと皆が願っているのだ。



「あら、こちらの部屋におられたのですね」

最近日課になった午睡の時間。

いつもより少し早めに目覚め、寢室を出て隣室にいた翠玉は、様子を見に来た華南に声をかけられ肩をすくませる。

「たまにはね！ 早く目が覚めちゃって……冬隼には内緒にして」

その言葉だけで、華南はすべてを理解した様子でクスクスと笑った。

「まったく、殿下の過保護具合ったら、昔から知る私たちから見ても驚くほどです」
寢室の隣……翠玉がいる部屋は冬隼の執務室で、手にしているのは兵法の書だった。

その周辺には武具の図解や計算を行ったあとの紙束などが積まれている。

次の戦いに向けて、今の禁軍の状況を把握しながら、新たな策を思案しているところだったのだが、この姿を冬隼に見とがめられようものならば、執務室に立ち入ること

とを禁じられかねない。

彼はどうやら翠玉と腹の子の状態が安定するまでは、戦の事一切から翠玉を遠ざけたいと思っているらしい。

冬雫がそう考えているのも無理はない……と翠玉も理解はしている。

西の隣国である緋堯国が、突然この湖紅国に兵を挙げてきたのは翠玉が嫁いで数か月経った頃。

祖国の知将から学んだ兵法の知識を活かし突飛^{とっぴ}な策を提案した翠玉は、緋堯軍を翻弄^{たづな}して見事に追い返すことに成功した。

しかしそれは序章にすぎなかったのだ。

翠玉の策により大幅に兵力を削がれた緋堯国は、その時を虎視眈々^{こしたんたん}と狙っていた北の大国・紫瑞国に乗っ取られ、実権を握られた。実は湖紅国と緋堯国の戦はそもそものところ、紫瑞国の宰相^{さいしやう}である董伯央^{どうはくやう}が仕組んだものだったのだ。

彼は、この大陸全土を統一し、自国の手中に収めるという大きな野望を抱いていた。その最大の障害となる南の大国・碧相国^{へきさうこく}への足掛かりとするために、大陸の中央に位置する小国・緋堯国が最初の標的となり。その隣国であり豊富な鉱物資源をもつ湖紅国もまた、次なる標的と定められていることは容易に想像できた。

現状、大陸には大小さまざまな八国があり、絶妙な力関係で成り立っている。紫瑞

国はともかく、他の国は戦を望んでいないと考えた湖紅国は、碧相国と響透国^{きやうとうこく}に働きかけ、連合軍を形成して紫瑞国を迎え撃つことにしたのだ。

とはいえ、大陸全土の均衡を変えかねない戦、加えて知将と名高い董伯央との頭脳戦は困難が予想された。

しかしそんな中、大きな希望が翠玉の元に舞い込んだ。

十年前、祖国である清劉国^{りやうこく}の後継争いに巻き込まれ、戦の最中に行方知れずになっていた次兄、劉蓉芭^{りやうようば}との再会だ。

死んだと思われていた兄は、碧相国に身を隠し生き延びていたのだ！

彼は、碧相国の将・李周英^{りしゅうえい}として碧相軍を率いていた。これにより、不安視されていた連合軍は、董伯央の読み反して見事な連携を見せた。

加えて翠玉が先の戦から温めていた地形を利用した策も功を奏し、少しばかり無理はしたものの、勝利を収めた。

董伯央は最後の最後まで足掻き続け、策を講じながら撤退したものの……。碧相国の奇人、第三皇子の碧風諤^{へきふうが}に目を付けられ、せっかく手にした緋堯国の実権すらかなり捨てねばならないほど追い立てられ、何とか自国に戻ったそうだ。

しばらくは大人しくしているだろうが、野心家の彼がこのままあきらめるとは到底思えない。いずれまた、動き出すに違いないというのは、連合国全ての総意だ。

とはいえ、碧相国の傘下に入り国の立て直しを図っている緋堯国に再び手を出すのは難しいだろう。

そうであるならば、次なる標的は紫瑞国と実質往来ができる国……翠玉の祖国である清劉国と考えられる。清劉国皇帝である翠玉の異母兄は、母後の言いなりになる矜持だけが低い無能な男。董伯央が本気を出せば、容易く実権を握ることができるだろう。

それは、翠玉たちがつとも避けたい展開であった。清劉国は、湖紅国と碧相国と隣り合っている。清劉国が董伯央の手中に収まれば、両国とも国土を脅かされることになるからだ。

元より、清劉国が紫瑞国に下る可能性を危惧していた兄は、無能な清劉帝とその母を引きずり下ろし、碧相王を後ろ盾として清劉国の帝位を奪還する作戦を立てていた。もともと、優秀な世継ぎ候補であった翠玉の兄達に日常的に刺客を差し向け、長兄と母に毒を盛り弑し、蓉芭を追いやったのは、彼ら親子だった。

それだけでは飽き足らず、帝位についた後には、一人残された翠玉を後宮の中で飼いやしにしようとしていたのだ。

湖紅国に住む叔父と伯母の働きかけのおかげで嫁ぐことができたものの、そうであれば、翠玉は今も変わらず清劉国の後宮の片隅にただ置かれていたに違いない。

それは、想像するだけで恐ろしいものだった。

彼らに対する怒りは今も晴れていない。多くの命を奪っておきながら、皇帝として政をうまく動かせている様子はなく、むしろ衰退の一途をたどっている。

そのうえ他国に蹂躪される隙となるならば、いつそ彼らを討ち、本来帝位につくはずであった兄を玉座に推したいというのが、翠玉の素直な気持ちだ。

義兄である湖紅国皇帝も、蓉芭を清劉帝にするべく助力するとの判断を下した。

董伯央を……紫瑞国の動きを抑え込むことに成功した今、各国は帝位奪還作戦を成功させるために動き始めていた。

その作戦の決行日——清劉帝の在位十周年を祝う祝賀までは、あと一年ほどしか時がない。

子を産んで、床が明けたのち、十分な体力が残っているだろうか……体に鈍りはないだろうか……今から不安は尽きない。動けない今、勘だけは鈍らせたくない、そんな焦燥から、どうしても時折、軍のことや兵法に触れなくなる。

しかし、妊娠してからめっきり過保護になってしまった冬雫の気持ちを思うと、彼の前でその衝動を見せるのは忍びなかった。

なにせ翠玉には、妊娠をわかっていながら一刻ほど馬をかけ、そのまま戦場に飛び込み、敵兵と攻防を繰り返して、自分の倍はあろう体格の敵将を見事討ち取り、そして

倒れた……という前科があるのだ。

流石に、これ以上彼に心配をかけるのは気の毒だ。

「今日は軍議がないと聞いていますから、殿下もお早くお戻りだと思っので、ほどほどに切り上げてくださいね」

そう言った華南は部屋の際に置かれた卓から椅子を引つ張り出すと、翠玉のもとに持つて来て座るように促してきた。そういえば、夢中になるあまり、書棚の前で立ったまま読みふけてしまっていたのだ。

「先ほど後宮から書状と見舞いの品が届きました。泉妃様からのようです」

翠玉が、椅子に掛けるのを見届けた華南が、懷から一枚の書状を取り差し出してきた。

優しい気な花の香りが焚かれた上質な書状には、確かに泉妃の筆跡で、なかなか体調が安定しないため後宮に招くことができず申し訳ないという旨と、翠玉の体を案じ自身も使っていた悪阻を軽減するといわれる灸と香を取り寄せたので使つて欲しいという旨が記されていた。

前回、皇帝と皇后に謁見した際、少しばかり悪阻の症状が出ると話したのが泉妃の耳にも入ったのだろう。経験者が実際に使つていたというものを知ることができるのは非常にありがたい。

「泉妃は、まだお加減が悪い日もあるそうね……」

「後期になつても悪阻が抜けないという方もまれにいらつしゃるようですから」

こればかりは人それぞれですからね……と言われ、出立前に会つた気の毒なほどやせ細つた泉妃の姿を思い出す。

彼女は今回で四回目のお産だが、今までにないほど不調が多いと聞いている。同じ母でもお産とはそれほど毎回様子が違うものだというから不思議だ。

「泉妃様の場合、第一皇女殿下のこととおありでしたし、精神的な負担なども大きいのかもしれませんね」

華南の言葉に、翠玉は「そうね」とつぶやいて、以前握つた熱を帯びた小さな手を思い出す。

皮肉なことに、この湖紅国の後宮でも子供たちが陰謀の犠牲となつた。

はじめは、第一皇子である爛皇子の周辺で毒を塗られた針が見つかった。

その後、泉妃の宮に刺客が侵入した痕跡が多数見つかり、後宮内にいる悪意を持つ誰かの存在が浮き彫りとなつたのだ。

その後、子供たちと泉妃は皇后宮に身を寄せ、平和な日常を取り戻した。しかし、翠玉達が緋堯国との戦いに出ている間に、後宮内に黄毒が出回つたのだ。

その黄毒に侵され、泉妃の生んだ一人目の皇女・香蘭は、生死をさ迷つた後に視力

を失った。同じく黄毒に侵された第三王子は帝位継承権を放棄し、その母である廟妃ひょうひと共に後宮を出た。

翠玉の機転により最悪の結果は免れたものの、黄毒事件の影響はいまだに尾を引いている。

そもそも黄毒は、湖紅国ではあまり知られていないものの、清劉国の後宮では一時期よく使われた毒で、翠玉の母や長兄が亡くなった原因でもあった。

そしてそれをよく使っていたのが、現在の清劉国皇帝の母である皇太后だ。彼女には、華遊かゆうという名の似た気性の娘がいる。彼女は今、劉妃りうひと呼ばれ、第二皇子の母として湖紅国の後宮にいた。

母親が愛用していた毒を使った事件……どう考えても怪しいのは劉妃ではあるのだが、確たる証拠がない上に、解毒剤の主成分となる柱竜けりりゅうを差し出したことから、追及されないまま終わっている。

なにより翠玉にも、幼い頃から悪知恵が働いていた異母姉がそんな分かりやすい方法をとるとは到底思えなかった。

その後、現湖紅国皇帝の即位後より、幽閉に近い形で蟄居ちつきよしていた皇太后の命で後宮を暗躍していた東左の存在が明らかとなり、後宮で起こった不穏は彼らの仕業ではないかと考えられるようになったのだが……国の未来を担う幼子達が今でも後遺症に

苦しんでいるのは、見ていて辛いものがある。

黄毒事件の際、泉妃は妊娠初期であった。ただでさえ不安定な自身の体調に加え、愛娘に降りかかった不幸は彼女の心身に大きな負担を与えただろう。

「爛皇子にも兵法の指南をする予定だから、ご様子をうかがって、何かいい煎じ薬を作れないかしらね……後宮には立派な医官がいるでしょうけど……」

「いずれは自分も通る道かもしれないし、それなら冬隼も反対はしないと思うのよ?」と華南を窺い見れば、「いい案ですね!」と彼女も微笑んだ。



翠玉が泉妃と謁見できたのは、それから半月ほど後だった。

彼女の姿を見たとき、翠玉は驚きで言葉が出なかった。華奢きゃしゃだった彼女は、驚くほどにふっくらとしていて、しかし顔色は相変わらず青白かった。

本当にこの人が泉妃なのだろうか? と目を疑うほどだ。

「お恥ずかしい姿で……あまり食欲もないのに。やはり伏せているせいか、太ってしまつて……」

翠玉の反応に、彼女は恥じるように苦笑した。

「とんでもないです。ご体調が優れないと伺っておりますが、お加減は大丈夫でしやうか？」

慌てて取り繕うが、動揺は隠しきれなかった。

太ったというよりも、これはどちらかというと……

「ええ、今までの子たちはこんな事なかったのだけど……歳のせいかしら、身体がだるくて、少し動悸どうきもあって、浮腫むくみが酷いのよ」

そう言つて、彼女がちらりと見せた足は、おおよそ華奢で折れてしまいいそうだった頃の彼女からは想像がつかないくらい、象の足ののように浮腫んでいた。

「どうも身体の水分がうまく排出できないみたいで……夜になると特に痛みがひどくて……。こんなに外見も変わってしまったから、あまり外に出る気にもならなくて……」

そこでハッとしたように泉妃は両手を振る。

「でもこんな事初めてなのよ！ 他の子どもの達の時全然体調も良く過ごしていたの、だから心配しないでくださいね」

妊娠中である翠玉を不安にさせないように言添えたのだろう。その気遣いは以前と変わらないあたたかなものだ。

「悪阻はもう終わりましたか？」

話を变えるように問われ、翠玉は苦笑する。

「はい、どうやら少し前に終わつたようで……いまは多少の眠気くらいで、自分が本当に妊娠中なのかと疑わしいくらいなんです」

そう話しつつ、泉妃に促されて室内に入ると茶が用意されていて、互いに席につく。「たしかに、この頃はあまりお腹も大きくないですものね。あと数週間もしたら胎動たいどうがありますから、それが分かるとまた気分的にも変わると思いますわ」

ふふふと嬉しそうに言つた泉妃は随分と大きくなっている自分の腹を撫でた。

その姿に、少しだけ翠玉の肩の力が抜ける。

そして、今日は彼女に聞きたいことが沢山あつて訪ねてきたのだと思ひ出した。

「その……胎動ってどんなものなんです？」

興味津々に身を乗り出せば、泉妃も楽しそうに肩を上げ、

「んー、初めはお腹の奥の方で、ニルンとした……小さな魚が泳いでいるような感覚かしら？」

うまく説明できないのですけど……と小首を傾げる。

「なるほど……勉強になります。もう本当にすべてが未知の事過ぎて、今日は色々教えていただきたいと思つて参じさせていただいたのです」

素直に本来の目的を話すと、泉妃も理解していると言うようにクスクスと笑つた。

「はじめはそうでしょうね、何かあれば遠慮なく聞いて下さいね。四人分は経験しておりますから」

四人……あらためて、彼女の凄さに感嘆する。

「頼もしい限りです。頼りにさせていただきます」

「まあ、翠玉様にそんな事を言っていただけの日が来るなんて嬉しい限りですわ」
 パチンと、ふつくとした手を胸の前で合わせた泉妃の笑顔は以前の少女のような笑みのままで、少しだけ翠玉は安堵した。

「泉妃様のお体は、少し心配ですわね」

帰宅して部屋に戻る道すがら、ポツリとつぶやかれた華南の言葉に翠玉も同意して頷く。

「あの浮腫や動悸が、お産の障りにならないといいますが……」

外見があんなにも変わるほどの浮腫が、普通のものとは到底思えなかった。

おそらく後宮の医官も分かった上で治療に当たっているのだろが……

「そうね……ただでさえ、調子を崩されて体力も消耗しているしね」

顎に手を当てて、考え込む。

「薬を作るなら、まず症状の原因を突き止めないと！ ……よね？」

「勉強熱心なのはいいのですが、ほどほどになさってくださいね！」

体調は戻ったが、まだ本調子ではないのだから……分かっていますね？ と、華南

は翠玉に釘を刺すことを忘れなかったのである。



泉妃を尋ねて一週間ほど経過したある晩。

いつも通り、就寝の準備を整えた翠玉と冬雫が寢屋で寛いでいると、少し前に下がったはずの陽香^{ようか}が慌てた様子で部屋の扉を叩いた。

「どうしたの？」

後宮勤めが長く、普段どっしり構えている彼女がこんなに慌てることも珍しいと思

い、すぐに扉を開ける。陽香は部屋に転がり込むなり、あわあわと説明を始めた。

「惶^{せい}殿下が！ 第二皇子殿下がお付きの女官一人を伴って、馬車にてお越しにございます！」

「は？」

あまりに唐突で、そして意外な名前に、翠玉も冬雫も上手く情報が処理できずに茫然と立ち尽くした。

「女官によれば、御身の危険が迫っており、叔母上である翠玉様へ保護を求めて参ったと……」

陽香自身も信じられないという様子だが、とりあえず事実を整然と報告してくれた。御身の危険……とりあえずそれだけが引かかつて、冬隼と二人同時に歩が出た。

「お前は、ゆっくり来い」

冬隼に肩を掴まれ、言い含められる。咄嗟に足を止めると、それを了と受け取ったのか、冬隼は陽香を伴って足早に部屋を出て行った。

そして、翠玉が到着した時、門には後宮の紋の入った馬車が一台停められており、馬車の前では年若い女官が一人、礼をとっていた。

歳の頃は二十を超えた頃か。若いが、臆する様子もなく冬隼に対峙している。

どうやら彼女は頭を下げるばかりで、まだ何も話していないようだ。

その時、凜とした瞳が翠玉を捉えた。翠玉の姿を確認した彼女は、ようやくそこで夜分に突然の訪問をした事を詫びる口上を紡ぎ、自らの名を^祥と名乗った。

そして、胸元から書簡を出すと、冬隼ではなく翠玉に手渡す。

一度冬隼と目配せをすると、「受け取って開いて見ると」とでも言わんばかりに頷かれる。

香の焚かれた高級な書簡を開いてみると、まず目に入ったのは異母姉の印章だった。

中身は至って簡素だった。

ただ、『惺殿下の後見を一任する』との一文が、時節の挨拶もなしに書かれているのみ。手紙というよりは、ただの任命書のようなものである。

これだけでは、異母姉の意図がわかるわけもなく、首をひねる。

覗き込んできた冬隼もいぶかしげな顔をしている。

「どういう事だ？」

冬隼が祥に問いかけるものの、彼女は深く首を垂れて。

「私にも詳しくは……貴妃様の御身が拘束される運びとなりましたので、その前に殿下の御身を安全な場所に……と言うことで、こちらにお送りするよう命を受けましたので」

淡々とした口調で説明した。

「拘束!？」

「何があったんだ!？」

冬隼と顔を見合わせるものの、互いにそんな話は初耳だ。

異母姉はいったい何をしでかしたのだろうか。

とはいえ、幼い惺皇子が事情を話せるはずもなく、何かを知っているであろう目の前の祥は頭を下けたまま、その先の説明をするつもりはないようだ。

「とにかく、時間も遅い。惺殿下を中に！ 部屋の準備をさせろ」
冬隼が側に控えていた陽香に指示を出す。

この場に桜季がいけないということは、すでに彼女が動いている可能性は高いだろう。「俺は、兄上の所に行つて状況を確認してくる。殿下の事を頼む。落ち着いたら早めに休んでくれ」

冬隼はそう言つて、翠玉の肩に手を置いた。

そして、息をつく間もなく侍従達に馬の手配を命じ、警護についても指示を飛ばしていく。惺皇子は皇位継承二位にあたる。予想外の出来事ではあるが、そんな身を預かるのだから、警備に手抜きなどあつてはならない。

「分かったわ。気をつけて」

頷くと、冬隼の大きな手が頭をボンと一つ叩いた。

すぐに彼は着替えのために自室に足に向けて離れて行く。

冬隼の姿が見えなくなると、翠玉は一つ大きく呼吸をして、いつのまにか顔を上げている様に向かい合う。

「殿下をお通しして」

そう告げれば、彼女はすぐに馬車の扉側に回り、「よろしゅうございます」と声をかけ、扉を叩いた。

すぐにカチリと音がして中の鍵が外され、扉が開く。

出てきたのは一年ほど前に出会つた、異母姉の足にまわりついて怯えていた少年で間違ひなかった。

以前に比べて少し背が伸びただろうか。

異母姉譲りの、整った顔立ちはまだ幼く丸みがあり、翠玉を見上げる瞳は不安そうに揺れている。しかし儚さが際立つていた以前と比べて、どこか凜とした雰囲気を感じ、この一年での彼の成長を感じた。

「こんばんは、惺殿下」

動揺を悟られないよう、落ち着いた調子で声をかける。

惺皇子の頬が緊張するのがわかった。

「こんばんは、叔母上様。やぶんに突然の訪問、まことに申し訳ありません」

それでも翠玉をしつかりと見据えて、彼は一礼した。

その姿が何故かとても痛々しくて、翠玉は側に寄り身をかがめた。

「お母上様からの書状は確かに確認いたしました。今夜はこちらでゆっくりお休み下さい」

そう告げると、惺皇子は明らかにほっとした様子で肩を下げた。

いつの間にか桜季が戻ってきて、回廊の先で礼を取っている。とりあえず部屋の手

配が完了しているということらしい。

「こちらです」と先を示せば、惺皇子の後ろに祥が続いて、二人は静かに翠玉の後をついてきた。惺皇子からも祥からも、道中何も言葉はなかった。

部屋へ案内すれば、侍従達がせつせと寝台や調度品を整えており、それを待つために卓に茶が用意されていた。祥は侍従達と共に部屋を整え始め、手持ち無沙汰になった翠玉と惺皇子は、ひとまず二人で卓につき茶を飲むことにした。

翠玉は惺皇子から話を聞き出そうとしたものの、どうやら彼自身、何がどうなっているのか分らないと言っている。ただ、いつものように眠ろうとしていた所に、母がやってきて馬車に乗せられたという。

その割に、随分と落ち着いている。普通の九歳の子供ならば訳もわからず母から離され、追いつかれれば、混乱して泣いていてもおかしくはない。

きつと何かある……それはわかったが、深夜にこんなに幼い子供を詰問する気にはなれなかった。

結局、身の回りに不自由がないかどうかを確認して、部屋が整ったところで翠玉は部屋を辞した。

警備の配置を確認して、二、三指示を出すと。そのまま寝屋に下がる。

少し前には、この部屋で冬隼とのんびりと過ごしていたのに、随分と状況が変わっ

てしまった。

冬隼はすぐに皇宮に走ったが、戻るのは何時になるのだろうか。

お前は休めと言われたが、正直休んでいられる状況ではない。しつかり目が冴えてしまった。仕方なしに寝台に横になり、ぼんやりと天蓋を見つめた。

きつと明日から忙しくなる。少しでも体力を温存しておかねば。

そう思いつつぼんやりしている内に、いつの間にか眠りについていた。

結局、冬隼が戻ったのは朝方だった。

寝付いた方がいいが、やはり眠りが浅かった翠玉は、冬隼の立てるわずかな衣擦れの音でも目が覚めた。

身を起こした翠玉に、寝巻きに着替えた冬隼は諦めたように笑った。

そのまま寝台に入ってきた彼は横になると、翠玉の手を引いて自身の肩に頭を乗せさせて、きゅっと抱き寄せた。冬隼の胸に頬をすり寄せる形になり、硬くて温かいそれに、何故か少しだけ落ち着いた気分になる。

「どうやら、黄毒事件の件で劉妃に再度容疑がかかったらしい」

冬隼の低い声が、彼の胸を伝って耳に直接響いた。

「皇帝の直下部隊の調べでは、あの毒に使われたいくつもの特殊な実の片が、劉妃の

宮に仕える女官の部屋から発見されたらしい。そして極め付けに、劉妃の部屋からあの時使われた黄毒を始めとする様々な毒物の作製方法が書かれたものが見つかった」

翠玉は息を飲んだ。それは完全に黒ではないか。

しかし、事件の直後にも一度、劉妃の宮には調査が入っていたはずで、当時は証拠となるものは何も見つからなかったはずだ。

だからこそ、皇太后の暗躍が明るみになった今、すべては東左の仕業ではなからうかと考えられていたのに。

「劉妃は知らぬと関与を否認しているらしいが、追及は免れないだろう。どこで察したのかは分からないが、彼女を拘束するために近衛が動いた時、彼女は近衛の到着よりひと足早く惺殿下を城外に逃したというわけらしい」

そこまで説明して、冬隼は大きく息を吐いた。

「なんで……今になって？」

あの事件があったのはすでに数ヶ月も前の事だ。

何故今になってこんな急展開を迎えたのだろうかと思しき不思議に思う。

「どうやら垂れ込みがあったらしい。詳しくは分からないが、もう一度劉妃の宮を改める必要があるという意見が出て、踏み込んだと聞いた」

「垂れ込み？」

翠玉の問いに冬隼も分からないと、首を振る。

「とにかく、兄上からは、殿下の御身はしばらくこちらで預かって欲しいと頼まれた。警備の者も皇宮から回してくれるらしい。様子はどうか？」

「何も知らないとは言っているけど、妙に落ち着いているから、きっと何かは知っているはずだけど……」

無理に聞き出すのは、あまりいい結果を産みそうにない気がするのだ。怯えて心を閉ざされそうな、そんな危うさを感じている。

それを話せば、冬隼も理解できると領いた。

「とにかく、しばらく殿下を頼む。意思疎通をとって信頼関係を築いてくれ。劉妃が何故、ここを殿下の避難先を選んだのか……それは知っておかねばならんだろう」

「分かったわ」

領いて、冬隼の胸に頬を擦り付ける。

すぐに冬隼の寝息が、胸を伝って聞こえてきた。相変わらずの寝落ちの早さだ。トクトクと規則正しい彼の胸の音を聞きながら、翠玉も眠りについた。



翠朝、惺皇子の様子を見にいくと、彼はほんやりと庭の景色を眺めていた。

整ったあどけない頬には涙の筋が残っていたが、翠玉の姿を見とめるとサッとそれを拭い取り、背筋を伸ばして立ち上がった。

「よく、お眠りにはなれませんでしたか」

異母姉譲りの睫毛の濃い大きな瞳の下に隈を見て取り、無理もないと翠玉は息を吐いた。

世話役としてつけた侍女から、朝食もほとんど喉を通らない様子だと聞いて、心配してきたのだ。

唐突に起きた昨晚の出来事が、幼い彼の心に作った傷は相当なものである。

今まで後宮の自宮の中でしか生活していなかったものを、母と離れて突然外に出された上に、叔父叔母といえど馴染みもない者達の邸に身を置く事になったのだ。

彼にとって、どれほどの負担であろうか。

立ち上がって翠玉を迎えた惺皇子をもう一度窓際の長椅子に座らせて、その前に屈む。

「お母上様の件はこちらでも確認させていただきました。しばらくは、こちらで御身をお預かりするようお父上様からも申し付かっておりますゆえ、遠慮なくお過ごしくださいね」

まだふつくらとした小さな手を取り、その手を優しく握る。

彼はコクリと小さく頷いて、翠玉の手を握りかえてきた。

きゅっと真一文字に結ばれた薄い唇は、どうやら父親である皇帝譲りで……もつと言えば叔父にあたる冬隼ともよく似ていた。

「母から……叔母上にまだ書状があるのです」

しばらく何かを迷うように視線を彷徨わせた惺皇子は、一度室内を見渡し、自身の連れてきた祥だけが残っている事を確認して口を開いた。

「書状？」

首を傾けた翠玉に、祥が椅子を持つてくる。

促されるままに椅子に掛けると、惺皇子は胸元から一通の書状を取り出した。

「母からは、叔母上様だけに見せると言われています」

そう言った彼の大きな瞳は、緊張したようにこちらを見上げていた。

受け取って開いてみれば、昨晚と同じ筆跡と印章がある。

『おそらく私は罪を裁かれる。』

惺を後宮に置いておくのは彼の命を危険に晒すこととなる。

絶対に後宮に渡す事はしないで欲しい』

昨晩と同じ大雑把すぎる説明と、意図の読めない願いに、翠玉は再びどういう事かと首を傾げる。詳しい説明は何一つとしてなく、自身の希望だけを押し付けた文章は、あの異母姉らしいと言えbraしいのだが。

戸惑って惺皇子を見ると、彼は手を出して書状を返して欲しいと言った。

素直に手渡すと、惺皇子は脇に控えていた祥に、それを一瞥すらしないまま渡してしまった。

受け取った祥もまた、それを一瞥することなく。ただ黙って傍に置かれた燭台しょうたいに火を灯し、同じように傍に用意されていた皿に書状を投げ入れた。

書状はいとも容易く、橙色の炎を上げて燃え上がり小さくなった。

最後にチラリと浮き出てきた姉の印章が燃える様が、なんとも不吉な予感を連想させて、翠玉は胸騒ぎのような心地悪さを覚えた。

炎が尽きるのを、惺皇子も黙って見守っている。九歳の子どもが自身の判断でこんな事ができるはずもない。全て異母姉に指示されていたのだろう。

炎を見下ろす幼い顔には、罪悪感というものは微塵かみじも感じられなかった。

書状が燃え尽きるのを確認した祥が、皿を持って下がる。

「お母さまは、帰ってこないのでしょうか？」

ポツリと、小さくか細い声で惺皇子が呟いた。

その声は、初めて彼が本心を見せたような、子供らしさの残るもので。

胸が締め付けられそうな痛みを孕んでいた。

「わかりません。今調べているところのようですから、沙汰を待ちましょう。私も色々情報を集めて参りますから」

もう一度惺皇子の手を握ると、そのあどけなく美しい顔が泣きそうに歪んだ。

どうやら、劉妃の罪は黄毒事件の件だけではなく、毒針や泉妃の宮の刺客の件まで遡って調べられているらしい。

これが全て彼女の仕業なら、廃妃はいひの上、極刑は免れない。

もちろん惺皇子も良くて流刑となるだろう。

彼の処遇がどうなるか分からない今……この寄る辺もなく不安そうで儂い姿に、「お守りいたします」と言ってやれない事が心苦しくてならなかった。



「なぜ惺殿下を後宮には置きたくないのだろうか？」

朝の惺皇子とのやり取りを、昼に戻ってきた冬隼に話して聞かせると、冬隼は眉を寄せた。

「わからないわ。ただ自身の経験から後ろ盾のない皇子は殺される運命だと思っ
ているだけなのかもしれないけど……ほら、自分の育った清劉の後宮がそうだったか
ら……」

膳を突きながら、昔のことをいくらか思い出した翠玉は、眉を寄せる。

異母姉がそんな危機感を覚えてもおかしくないくらい、あの頃の祖国の後宮は荒れ
ていた。しかし、その渦中で手を下していたのは、主に彼女の母であったのだが……
だからこそ、怖いかもしれない。

「とにかく翠玉に後見を、との一点張りらしい」

参ったように冬隼が息を吐く。

朝から宮廷に詰めて惺皇子の処遇についても話をしてきたらしいのだが、異母姉は
「皇子の身が危ない」「後宮では危険だ」と繰り返すばかりだという。

罪を問われて拘束されているとはいえ、惺皇子の身を誰よりも案じる母親のただな
らぬ主張に、流石に皇帝や皇后も無理やりそれと突っぱねる事はできないようだ。

これを無視した結果、惺皇子の身に何か起こってしまうのは望まない。

仕方なしに。とにかく劉妃の調べが終わり、処遇が決定されるまで、惺皇子は翠玉

の庇護^{ひごか}下に置くことになったのだという。

「あの人が私を頼るなんて事、ありえないと思うのだけどねえ」

翠玉の中では、それがなによりも不可解なのだ。

あれだけ毛嫌いで、突っかかっていたにも関わらず、大事な子供を預けたいと思
うものだろうか。生涯、相容れることのない相手だと思っていたのに……

「そこまで自分の立場が危ういと理解しているのだろうか。後宮が無理ならば、彼女
には他に頼るところもなかっただろうし……」

冬隼の言葉に翠玉も頷く。

そして朝から燻^{くす}っていた疑念が、胸の内に湧き上がる。もしかしたら、異母姉はこ
のために祖国から姉妹を輿入れさせたかったのではないだろうか。

しかし、そんなに前から何かを企んでいたのか？

「一度、姉に会えないかしら？」

どうにしても、異母姉の意図がわからないままでは、惺皇子を守ることもできない。
彼女の真意を知る必要があるだろう。

「手続きを……取ろうか？」

あまり浮かない顔をした冬隼の問いに、翠玉は苦笑する。

翠玉にこの件に関わって欲しくないと彼が考えているのはよくわかる。

異母姉が何を恐れているのかはわからないが、下手をすれば翠玉の身も危険に晒すこととなるのだ。

しかし、幼い皇子を放っておくこともできない。

翠玉にとっても冬隼にとっても血の繋がった甥である。

「お願い」

「わかった。ただ、今色々と聞き取りもされているらしいから、数日はかかるかもしれない」

冬隼の言葉に対し、翠玉は理解しているとの気持ちを含めて静かに頷いた。

◇

異母姉の部屋は宮廷の奥深く、限られた近衛に守られた一角にあった。

冬隼に付き添われ部屋の前まで向かうと、扉の前で冬隼と視線をかわして頷き合う。

「惺はどうしている？」

翠玉が一人で入室すれば、寝台に座った異母姉は相変わらずの高飛車な顔つきでこちらを見やり、挨拶もなしにその言葉を投げかけてきた。

どんなに萎れているのかと思ったのだが……後宮にいる頃と大して変わらない様子

に、翠玉はため息を溢す。

もとより、翠玉も親しく挨拶を交わす気はなかったで、彼女がその気ならばと、そのままつかつかと部屋の中央にある卓に向かい椅子を引き出して座った。

「少し落ちついて、食欲も出てきたようです」

そう伝えれば、つり上がった形の良い眉がわずかに下がった。

「良かった、あの子は繊細ゆえ……頼む」

最後の言葉は絞り出すような声だった。

息子のそばにいられない無念さなのか、長年敵対していた翠玉に縋らねばならない屈辱からなのか……それは分らない。

ただ、この一言を発した後、劉妃の身体が少しばかり小さくなったように感じた。

「なぜ、私に殿下の御身をお任せになったのです？」

いつも自信と矜持に満ちていた、この人のこんな姿は、何故かあまり見ていたくなかった。兄達を失った頃は、この異母姉や母親を殺してやりたいとすら思っていたし、今でも許せてはいないのに。

「ソナタしか、おらんからだ」

キッパリと返ってきた言葉に、眉を寄せる。

「私が惺殿下を害すとは思わないのですか？ 貴方とその母上は、そうされて良いほ

どの事を私にできたと……まさかお忘れではないでしょうね？」

翠玉の問いに、劉妃がフンツと笑った。

「ソナタが慍を害して何か利があるのか？ 今更、復讐をするような性格ではなからう。慍を殺して、ここまで築いてきた立場を揺るがすような馬鹿な真似をソナタがするとは思えないが？」

翠玉は息を飲む。

それを見た劉妃は嘲笑う。

「私がソナタの事をただ野放しにしておいたと思うか？ 禁軍でどのような立場にいるかなど分かっているわ。ああ安心しろ、祖国には伝えていない。伝えてやる義理もないのでな」

ハハツと笑った彼女はそうしてどこか遠くを見つめた。

「どういう形になるかはわからない。だがソナタに頼みたいのは、慍が流刑になるならば、間違いなく安全にそこへ届けて生活を見守って欲しい。そしてもし都に残る事を認められた場合は、ソナタの元で養育してやって欲しいのだ」

「今そんな事を仰るとは……そうなるしかないほどの事を貴方はなさったというのですか？」

低い声で尋ねる。

脳裏に蘇ったのは、数ヶ月前に見た子供達が熱に浮かされる姿だった。あんな幼子まで手にかけたというならば、翠玉としてはその所業を許す事はできない。

翠玉の言葉に、劉妃は首を振る。

「いや……全てではない」

そう言って目を瞑った。

「ソナタがこの国にくる前の一つ二つは私だ。しかしそれを弱みに、狡猾に私は脅されていた……」

翠玉はまたもや息を飲んで、瞬いた。

その様子を劉妃は何も言わずに見つめている。

翠玉が、今聞いた事を整理するのをじっと待つかのように。

「脅されていた？ 誰に？」

乾いた唇から、何とか紡いだ言葉は少しかすれていた。

ようやく翠玉から出てきた問いに、劉妃は首を振る。

「ソナタも知っているであろう……皇太后の手の者に東左という男がいたことを……」

東左……久しぶりに聞いたその名に翠玉はこくりと唾を飲み込んだ。

冬隼兄弟に恨みを募らせた皇太后が、手足として使っていた刺客の男。その男が劉妃にまで深くかかわっていたというのだ。

「東左が、あなたに何を？」

翠玉の問いに異母姉はふんと息を吐いて自嘲する。

「今更細かなことをソナタに話してもしょうがなからう。実際には、ソナタの夫に討たれて素性が公になって初めて、あの男が皇太后の手のものだと思つたのだから……実のところそれまでの私は、あの男は皇后陛下の配下だと思つていた。……あれは皇后宮の宦官だったからな」

なるほど……と翠玉はうなる。

確かに東左は皇后宮の宦官であつたのだから、劉妃がそのように勘違いしていてもおかしくはなかつた。

考えてみれば劉妃は不自然なくらい、後宮内で自ら孤立し、誰も寄せ付けない姿勢を徹底していた。そうしたことの根底には、東左を介して皇后への不信任を募らせていたことが影響していたのかもしれない。これまでの後宮内での劉妃の不審な立ち居振る舞いについて、やけに納得できてしまった。

しかし……と妙に納得してしまった翠玉に、劉妃は続ける。

「皇太后も東左も死んだ以上、私が考えすぎているだけかもしれないが……まだ、何か引つかかるのだ。皇太后のたくらみ以外にも、他の誰かの思惑が絡んでいるような複雑な何かがあるような気がする」

そう言つて、劉妃は一度腰を上げて座り直すと背筋を伸ばした。

「だから、後宮の者に慍を差し出すわけにはいかない」

それがソナタの問いへの答えだ。

そう言つて劉妃は翠玉の様子を窺う。

「しかしこれは全て私の勘による憶測だ。だが、ソナタも何か引つかかっているだろう。私同様、こうした場数は踏んでいるはずだからな。とにかく慍を頼む、身重の体には多くは望まない」

そう言つて徐に立ち上がった劉妃は、翠玉に向かって深々と頭を下げた。

この人が頭を下げる事などそうあるはずがない……そう思つていたからこそ、彼女の行動が本心からの必死なものであり、そして、その言葉には偽りが無いような気がした。

しかし、解決したものと思つていた後宮内の問題に、まだ得体の知れない何かがあるのでは俄かに信じがたい。

だが、異母姉がその身可愛さに適当なことを言っているようにには、思えない。

そして何より、翠玉自身もずっと、何かを見落としているような得も言われぬ気持ち悪さを感じていたのだから。

しばらく思案して、深呼吸する。

「承知いたしました。もとより第二皇子殿下としての大切な御身。しっかりとお預かりいたします。しかし母は貴方様です。殿下のためにもきちんと皇帝陛下の調べに全てをお話くださいませ」

そう告げると、異母姉は勢いよく顔を上げ……かつて清劉皇室の至宝とも呼ばれたその顔に、悲しげな笑みを浮かべた。

「努力しよう」

それだけ告げて、彼女はすぐに笑みを引っ込めると、もう話はないとばかりに扇子を振って退室をうながしてきた。

自分勝手に相手に配慮のないその仕草に、どこまでも彼女らしいと呆れて、翠玉は席を立った。

「そうだ……実は惶には喘証ぜんしやうの気がある。季節の変わり目や埃ほこりが多いところや疲れからしつこく咳が出るゆえ、よく注意して見てやってくれ。私の宮に祖国から取り寄せたよく効く生薬があるが……あれは今皇帝陛下の監視下にある。捜査が落ち着いた頃に取りに行ってくれ。清劉出身のソナタなら、すぐにわかる」

翠玉が扉に手をかけようとする寸前。

もう言葉を発することはないだろうと思っていた異母姉が、思い出したかのように投げかけてきた。振り返ると、そこには言葉の軽さとは裏腹にまっすぐに翠玉を見つ

める劉妃の真剣な表情がある。

「祥からはそのような話は聞いておりませんが……」

「それは、あの者が失念しておったのだろう。まったく、そそかしい娘であつたかな」

そんな至らない者を彼女が側に置いていた上に、皇子を託すなどよほど切迫していたのだろうか。わずかに眉を寄せるも、もう異母姉はこちらを見ることもなく、早く去れと言わんばかりに扇子をバタバタとさせる。

まったく、本当に勝手な人だ。

軽く呆れて、扉に手をかけて今度こそ部屋を出た。

部屋を出ると、外には来た時のまま冬雫が待っていた。心配そうな視線を投げかけてくる彼に向って、軽く肩をすくめてみせると、無言のまま宮廷を後にする。

馬車に乗り込み、そこでようやく大きく息を吐くと、冬雫が気遣わし気に手を握ってきた。

「大丈夫か？」

「色々……考えなければいけない事が多いわ」
目頭を揉みながら、翠玉は唸り、天を仰いだ。

立ち読みサンプルはここまで

「東左を介して、皇太后に操られていた……ということか？」

自室に戻り人払いを済ませると、劉妃に聞いた事を洗いざらい冬雫に話した。

「そう劉妃は言っていたわ……でもそれ以外にも何か思惑が交錯している気がするとも言っていたの」

どう思う？ と聞いてみれば、冬雫は寝台に腰掛けて考え込む。

「だから、惺殿下を後宮に置いておけない……と？」

「そのようね……まるでまだ後宮内に敵がいるかのような言いぐさだったわ」

「そうだな……その上自身がどの罪に関わったのかについては明かそうとはしない……だが劉妃の話を信じるのならば、黄毒を盛ったのは彼女ではないということか？」

「そのようね……もつとも黄毒の件は私も当初から彼女ではないと思っていたのだけど……」

彼女の狡猾さを知る翠玉にしてみれば、らしくないやり口であった。

そこに東左が関わりを持っていたというのであれば、彼が異母姉を陥れようとしていたというほうが納得できる。

「しかし、兄上にはそんな話は一言も話さなかったと聞いている。なぜ今になって翠玉に話したのだろうか」

「分からないわ……惺殿下を預ける以上、自身の潔白は主張しておきたかったのかしら？」

母親に対する疑惑が原因で、惺皇子がひどい扱いを受けないためなのだろうか……しかし、彼女は翠玉の性格上、惺皇子を蔑ろにすることはないと確信して、こうして惺皇子の後見に指名してきたはずだ。

沈黙が降りて、二人で思案する。

正規の取り調べには応じず、翠玉にだけ全てを明かしたその意味は……

ふと、嫌な予感がよぎって、翠玉はハッと顔をあげる。

同時に顔を上げた冬雫も、同じ表情をしていた。

「皇宮に向かったほうがいいかもしれないな」

「私も馬車を！」

腰を上げた冬雫に次いで、翠玉も腰を浮かせた。

その肩を冬雫に止められる。

「いや、お前はここで待て……杞憂かもしれない」

「でも！」

全てを聞いたのは翠玉なのだ。もしまだ間に合うのなら、最悪の状況を止めることができるのは、翠玉以外にいない。